

平成 28 年度静岡県（藤枝市）地域社会なぎなた指導者研修会報告

日 程 平成 28 年 7 月 16 日（土）・17 日（日）
会 場 静岡県武道館 第一・第二道場
受 講 者 44 名
派遣講師 佐藤 静子（教士）全日本なぎなた連盟評議員
安井みどり（教士）全日本なぎなた連盟国際委員長・審査員・理事

1 日目（16 日）午前は、必修化の現状と課題について安井講師が自身の執筆した月刊「武道」の記事を参照しながら受講者に説明した。なぎなたを授業で実施する上での長所は男女共習が可能であること、怪我の危険性が低いことであり、課題としては認知度の低さ、指導者の不足、指導法への不安が挙げられた。

全日本なぎなた連盟の調査ではなぎなた採用校数は微増との報告とともに、毎年 11 月に千葉県勝浦市の日本武道館研修センターで必修化に特化した全国なぎなた指導者研修会が日本武道館と共催で開催されており、多くの中学校教員が参加できるよう周知願いたい旨発言があった。

静岡県武道館山本館長は、自身の校長経験から静岡県でなぎなたが採用されるには評価基準が確立されていること、そしてなにより指導者の熱意（本気度）が重要であるとの発言があった。

座学後、指導計画の第 1 学年 1 時限（歴史・特性、自然体、中段の構え、振り上げ、振り下ろし、面打ち）・2 時限（礼儀作法、足捌き、体捌き、振り上げて面、面の柄受け、八相の構え）のグループと、3 時限（八相の構え、側面打ち、すね打ち）・4 時限（二段技と受け方、面・側面、面・すね、側面・すね、すね・側面）のグループに分かれて、それぞれ教師役、生徒役を分担してモデル授業を行い、指導のポイントや注意点を受講者に考えさせた。最後にホワイトボードにまとめて発表を行い、講師が疑問や指導上の悩みに回答し、全員で共有した。

講師から指導する上で、学校体育は社会体育と違い、なぎなたをやりたい人ばかりに教えるのではなく、中にはやりたくない人もいることを前提に指導者が情熱を持って指導にあたり、少しでも生徒の良いところを見つけて褒め、やる気を出させ、いかに生徒を引き上げていくか工夫しなければならない。指導教本通りに指導しなければならないというものではない。生徒の現状と指導者の力量に応じた指導をして欲しいと要望があった。

指導法については、「間合い＝相手の目と自分の目との距離」といったように、専門用語はなるべく使わず、生徒に伝わる言葉にする。“なぜ？”という疑問に対し、理由をつけて説明すると理解が深まり、好奇心が出てくる。

用具や打突部位などの名称は模造紙に絵を書いたり、童謡『うさぎとかめ』（も

しもしかめよ、かめさんよ・・・)の歌詞に合わせて動きを教えると八相の構えすぐに覚えられるといった具体例も示された。

評価については生徒に他の生徒の良い面を発表させ、教師が生徒の評価の着眼点を見る。相対評価とは別に絶対評価として、生徒がどれくらい頑張ったか(できないことができるようになったか)も見てあげる。

2日目(17日)は、午前にはしかけ応じを一本ずつ丁寧に、単に形の動きを覚えさせるのではなく、「理合」を説明し、理解させる指導がなされた。

午後は全日本の形1～5本目を、経験者には佐藤講師が一斉指導を行い、初心者には安井講師が少人数指導を行った。しかけ応じでは、「応じ」がただ受けるのではなく、攻めた気持ちで受けとめるよう指導があった。

【受講者の感想】

- ・自分がわかっているつもりでも、相手に理解させるのは難しい。分かりやすく伝える工夫が必要だと感じた。
- ・専門用語を使わず「しもしかめ」を歌いながら(手の位置は耳とポケット)八相の構えを教える指導法が印象に残った。
- ・中学校の実際の授業では生徒への声かけ(この場面で、この質問を投げかける等)まで緻密に計画されていることがわかり勉強になった。
- ・指導の手引に記載されている指導案は中学校では授業デザインと呼ばれているものである。学校現場で実際に使用されている授業案には先生の発問やできる子、できない子への声かけや指導法まで細かく記載されているので、改訂版を作成する際は専門でない教員が見てすぐに授業できるものにしてほしい。

